

万葉集984番歌の「我が恋ふる月」の解釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of “the Moon I Love” in the 984th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集984番歌「雲隠り 行くへをなみと 我が恋ふる 月をや君が 見まく欲りする」は豊前国の娘子が「月」に関して詠んだ歌である。この歌は写本に異同がなく、原文の訓読についてもほとんどの注釈書が一致しており、少なくとも表面的にはまったく問題がないように見える。しかしながら、この歌の意味は難解で未だに解釈が定まらない。その最大の原因は歌の前半と後半の内容が自然につながらないことにある。

本論文では、この歌を理解するための手がかりとして、同じ作者によるもう一つの「月」に関する歌（709番歌）「夕闇は 道たづたづし 月待ちて いませ我が背子 その間にも見む」の内容に着目し、984番歌を以下のように解釈する。709番歌の方は意味も明確で、月が出ていないことを理由に相手の男の帰りを少しでも長く引き留めようとする歌である。だとすれば、同じ作者による同じ「月」に関する984番歌もまたこの709番歌と内容的に密接な関連があることが予想される。もしそうだとすれば、第三句の「恋ふ」に類音の「乞ふ」が掛けられていると見て、「月が雲に隠れて家への帰り道がわからないから月が出るまで帰らないでください、と口実を付けてあなたを引き留められるように、もうしばらく雲に隠れて欲しいと私が願っている月なのに、その月をあなたは早く見たいと言うのでしょうか」と解することができる。作者は「月にもうしばらく雲に隠れていて欲しい」と願っているのに、男の方は逆に「その月が早く雲から出て来るのを見たい」と言う、この女と男の月に対する気持ちの「ずれ」を詠んだのがこの歌であろう。このように解すれば「我が恋ふる月をや」の「をや」という語がなぜ用いられているかもよく理解できる。

1. はじめに

万葉集984番歌は巻六の「雑歌」の一首で、歌の題詞によれば豊前国の娘子が月に関して詠んだ歌である。この歌の題詞、訓読文、原文、大意、注釈を「新日本古典文学大系」本にしたがって以下に示す。

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

①新日本古典文学大系^[1]

豊前国の娘子の月の歌一首 娘子は字を大宅と曰ふ。姓氏未だ詳らかならず

6/984 雲隠り 行くへをなみと 我が恋ふる 月をや君が 見まく欲りする

【原文】雲隠 去方乎無跡 吾恋 月哉君之 欲見為流

【大意】雲に隠れて行方がわからないので、わたしが恋しがっている月を、あなたは見たいと思うのか。

【注釈】この歌、譬喩あるいは寓意があるかも知れないが、捉えかねる。この作者は先にも月の歌を詠んでいた(七〇九)。

上の大意からもわかるように、この歌の真意がどこにあるのかまったくつかめない。その原因は、「月が雲に隠れて行方がわからないので」という歌の前半と「私が恋しく思っている月をあなたは見たいと思うのか」という後半の内容がどうしても結びつかない点にある。この結びつかない理由として、上の注釈では「譬喩あるいは寓意があるからかも知れない」と推測しているが、どのような譬喩や寓意があれば結びつくのか納得のいく説明がない。

この歌は写本に異同があるわけでもなく、また原文の訓読に関する問題があるわけでもない。少なくとも訓み方に関してはほとんどの注釈書が一致している。したがって、この歌の意味が理解できない原因を誤字や原文の訓み方のせいにはすることはできない。

参考のため、そのほかの代表的な万葉集注釈書の大意と注釈を出版年の新しいものから順に掲載しておこう。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、旧漢字は新字に改めた。

②新編日本古典文学全集^[2]

【大意】雲に隠れ 行くえが知れなくて わたしが恋しく思う 月をあなたも 見たいとおっしゃるのですか

【注釈】行くへをなみと—この行くへは、雲に隠れて見えなくなった月の入るべき辺りをいう。ナミトのトは、～とて、の意だが、この場合、意味がない。

※誰かの歌に答えた寓意の歌であろうが、いかなることを譬喩したものか分らない。

③講談社文庫(中西進)^[3]

【大意】遠く雲隠れてどこかへ行ってしまったと、私が恋しく思っている月をあなたは見たいとお望みでしょうか。

【注釈】月に月経の寓意があるか。「月をや」の「を」は目的格だが、詠嘆を含む。

④万葉集註釈(澤瀉久孝)^[4]

【大意】雲にかくれて行方がわからないので、私が見たく思つて恋しがつてゐる月をあなたが見たいと思つていらつしやるのであうか。

【注釈】行方を無みと一月の行方が無くなつたので。「みと」は既述(三・三四一)。この「行方」を作者の行くべき方とする説もあるが、その当らない事は考の条で述べる。

月をや君が一元(「を」の字、蝕の爲「と」のやうにも見えるが、校本増補部に「を」とあるに従ふ)、類(五・九)その他いづれもツキヤヤキミガとあるを附にツキヤキミガ、寛ツキヤキミガシと誤る。考にはツキカモとし、増訂本全注釈にはそれをとり、「秋夜之^{アキノヨノ} 月疑意君者^{ツキカモキミハ}」(十・二二九九)は調子の似てゐる句

である、と云はれてゐる。しかしその場合は「君は月か」の意であつてよく通じるが、ここは「君が云々」とつゞいてをり、「わたしのさがしている月ですか、あなたが見たいと思うのは」と訳されてゐるが、それならば、むしろ旧訓の如くツキヲヤと訓み、その「や」が係助詞となつて「する」と連体形で止めたと見る方が自然である。「哉」にヲを訓添へた例は、

相思はぬ妹哉イモヲヤモトナ本名菅の根の長き春日を思ひくらさむ（十・一九三四）

若草の新手枕をまきそめて夜哉ヨヲヤヘダテム将間にくくあらなくに（十一・二五四二）

の如きがあり、ここも認める事が出来る。たゞ上に「吾が恋ふる」とあるので新考に「君之は君毛の誤にあらざるか」といふ疑のもたれる事は湯口君も指摘されてゐるところである。

【考】代匠記には拾遺集の、

月のあかかりける夜女のもとにつかはしける 源 実明さねあきら

恋しさは同じ心にあらずとも今宵の月を君見ざらめや（巻十三）

をあげて「此ト似タル意ナルベシ」とあり、諸注にも多く同感されてゐる。攷證には「この歌、月によそへたる恋の歌にて、たとはゞ旅などに行きたる人を、月によそへて、その人を、吾も外の人も恋るを、その恋る人におくれる歌などにて、一首の意は、雲かくれて去方なくなりし月を恋る如く、吾恋る人を、また君も見まくほりするならんといへる也」とあるは少し考へ過ぎであらう。又私注には「月が雲にかくれ、吾が行くべき方が分らないので、早く月が出てほしいと吾が恋ひ思ふその月を、君も亦見たいと願はれるのですか」と訳し「行く方は作者の行く方である」といひ「月が雲にかくれて夜の道のたどき知られぬに對しての作であらう」といひ、この人の作、

夕闇は道たづたづし月待ちていませわが背子その間にも見む（四・七〇九）

と對比してその意明らかとならう、とあるが、「雲隠り行方を無みと」とあるのを「月が雲にかくれて、吾が行くべき方がわからないので」と解くのは無理であらう。せめて「行方を知らに」（二・二〇一）とでもあればさう考へられない事もないかと思ふが、「行方を無みと」であれば、雲にかくれて行方がわからなくなつて、と解くべきものだと思ふ。それにしても拾遺集の恋歌と似た歌だとされたり、また代匠記に「又ツキニヤキミガトヨミテ、吾コフル月ノ如クニヤ君ガ我ヲ見マクホリスラントヨメルカ。吾恋ル月ト云モ人ヲ兼テ云ナルベシ」とも云ひ、考に「人の恋おもふ人を月に譬てよみかけし哥歟只に月を見ともなし」ともあり、作者が豊前国娘子とあつて、筑紫娘子（三・三八一題）、河内百枝娘子（四・七〇一題）などと同じく国名を冠してゐる点も遊女らしく思はれるなどして、これを只月だけを詠んだとすると「をや」といひ「君が」といふ点にも疑問が感ぜられる。これはやはり代匠記、考、攷證に云つてゐるやうに月を人に譬へたと見るべきであるが、その月は吾が恋ふる人であると共にまた君が見まくほりする人、即ち作者自身をもさしたので、云はばこの作は男から作者を月にたとへて見たいと思ふと云ひよこした作に和したもので、雲にかくれた月を恋ひ慕つてゐるのは自分であるものを、その自分をあなたが見たいとおつしやるのは腑に落ちかねる、といふ意味にとるべきではなからうか。さうすれば「をや」の例二つ右にあげたもの、いづれも反語の意のこもるものであるやうに、これも「吾が恋ふる月なるものを、… その月を君が見たいとおつしやる事は信じ難い」となつて、「をや」と「が」との用例にもうなづかれるやうに思ふが、どうであらうか。

⑤日本古典文学大系^[5]

【大意】雲に隠れて行方が分らないからとて私が恋しく思っている月を、あなたは見たいとお思いのですか。○寓意があるか。少し分りにくい歌である。

【注釈】見まく一見ること。マクは推量のムのク語法。mimuaku → mimaku。

中西進氏は③の注釈の中で「月に月経の寓意があるか」と記しているが、仮にそうだとして、女が歌の中で「我が恋ふる月＝私が『恋する』月経」と言うものだろうか。大いに疑問である。

また澤瀉久孝氏は④の注釈の中で二つの仮定を設けて以下のように解釈している。一つは、この歌の月には二つの比喩が同時に重ねられていて、「我が恋ふる月をや君が」の「月」には相手の男の比喩、「月をや君が見まく欲りする」の月には女（作者）の比喩が込められているという仮定である。もう一つは、この歌は相手の男が女に「あなたを月に譬えて見たいと思う」と言ってきたことに対する返歌だという仮定である。この二つの仮定のもとで、「雲にかくれた月（＝あなた）を恋ひ慕っているのは自分であるものを、その自分（＝月）をあなたが見たいとおっしゃるのは腑に落ちかねる（信じ難い）」と解している。この解釈の前提になっている二つの仮定には確たる根拠がないので疑問だが、仮にこの二つの仮定を認めたとしても上の解釈には問題がある。というのは、この解釈では歌の前半があいまいに「雲にかくれた月（＝あなた）を恋ひ慕っているのは自分であるものを」と意識されているが、実際の歌は「雲隠り 行くへをなみと 我が恋ふる月…」であり、歌に忠実に訳すと「月が雲に隠れて行方が（知れ）ないからと（言）て私が恋しく思う月（＝あなた）…」という内容である。もし本当に相手の男が「あなたを月に譬えて見たいと思う」と言ってきたのだとすれば、男が直接逢いに来ない理由を女は知っているはずである。例えば、男が遠く離れたところに居て逢えないとか、あるいは親たちの反対や人々の噂のために逢えないとか、などなど。それなのに、女の歌の最初の二句は「月（＝あなた）が雲に隠れて行方が（知れ）ないから」となっており、あたかも男が行方不明であるかのごとき内容で、しかもそのことが「私が月（＝あなた）を恋しく思う」理由になっているのである。果たしてこのような内容の歌が「あなたを月に譬えて見たいと思う」と言ってきた男に対する返事だろうか。この疑問点のほかにも、先の第二番目の仮定には問題がある。次の節でも議論するように、万葉集には当該歌（984番歌）と同じ作者が同じテーマ（月と男の恋人）を詠んだ709番歌があり、この二つの歌は作者と歌のテーマがまったく同じであることから、内容的にも深い関連が予想される。もしそうだとすれば、709番歌では男は女の目の前にいることになっており、同じく984番歌でも男は女の目の前にいる可能性があり、先の第二番目の仮定と矛盾する。

以上見てきたように、従来の考え方（①～⑤）では984番歌を無理なく理解することは困難であるように思われる。

2. 新しい解釈の提案

前節の先行研究の結果が示すように、984番歌はこの歌を「単独の歌」として見る限りきわめて難解な歌であることは否めない。ところが、幸い、この歌の作者と同一人物が同じ「月」をテーマとして詠んだ歌が万葉集の709番歌に採録されている（〔6〕、p. 406）。以下に二つの歌を併記して示す。

4/709 夕闇は 道たづたづし 月待ちて いませ我が背子 その間にも見む
6/984 雲隠り 行くへをなみと 我が恋ふる 月をや君が 見まく欲りする

この二つの歌のうち709番歌の方は歌の意味も明確で、

暗い道は危ないから月が出るのを待ってお帰りください、あなた、その間にもいっしょにいきましょう

という内容である。豊前国の娘子が、月が出ていないことを理由に相手の男の帰りを少しでも長く引き留めようとする気持ちを詠んだものである。

ここで注目したいのは、709番歌と984番歌は万葉集での配置場所は異なるけれども（前者は第四巻、後者は第六巻）、作者は同一人物で歌の中心テーマも同じ「月と恋人の男」だという点である。したがって、この二つの歌はもともとは一連の歌だった可能性があり、内容的にも密接に関連していることが予想される。もしそうだとすれば、984番歌の内容もまた709番歌と同じく「月が出ていないことを理由に相手の男の帰りを少しでも長く引き留めようとする」女の気持ちが歌の背景にあると見て、次のように解することができる。

（月がちょうどタイミングよく）雲に隠れ、（そのおかげで）（あなたが家に帰る道の）行方がわからないからと（口実をつけてあなたを引き留めることができるので）、（今のまま雲に隠れた状態の月こそが）私が恋しいと思っている月なのに、その月をあなたは（早く）見たいと言うのでしょうか

ここで重要なポイントは「我が恋ふる月」という表現である。上代語の「こふ=恋ふ」は「思い慕う、眼前にないものに心惹かれる」の意で特に異性を思う場合に用いられることが多い（〔7〕、p. 307）。今の場合、作者が月に「心惹かれる」のは「きれいな月を早く見たいから」ではなく、「あたかも作者の気持ちを察するかのようタイミングよく雲に隠れて男の帰り道をわからなくしてくれているから」である。そのことは、歌の文脈で「行方をなみと」が「我が恋ふる月」の「理由」として詠われていることからわかる。「行方がない=男の家への帰り道がわからない」ためには「月が今のまま雲に隠れている」必要があり、作者にとっては「月が今のまま雲に隠れてくれるから」「恋しい月」なのである。このような解釈は、この歌の作者が709番歌で「月が雲に隠れて道が見えないことを理由にして男の帰りを少しでも長く引き留めたいと思っている」ことともつじつまが合う。なお、第二句の「行方をなみと」は「月の行方がわからないからと」の意にもとれるが、もしそのように解すると第三句「我が恋ふる（月）」とのつながりが不自然になり、「月の行方がわからないこと」が「私が月を恋しく思うこと」の理由になってしまい論理的に不自然な結果となる。したがって、709番歌の内容との整合性も考慮に入れると、「行方をなみと」の「行方」は「男が家に帰る道の行方」と解するのがよいだろう。

一般的な常識からすれば、月が早く出てきて欲しい、月を早く見たいと望むのが人情であるが、984番歌では作者は常識とは逆に月に「もうしばらく雲から出てこないで欲しい」と願っており、そのことがこの歌の重要なポイントになっている。このような解釈を裏付ける根拠がある。それは984番歌の第三句の「恋ふ」に類音の「乞ふ」が掛けられている可能性があることである。第三句と第四句の「我が恋ふる月」は原文では「吾恋月」となっており、普通の訓み方では「我が恋ふる月」であるが、「恋」と「乞」が類音をもつことから「吾恋月」には「我が乞ふ月」の意味が掛けられている可能性がある。もしそうだとすると984番歌は次のように解することもできる。

月が雲に隠れると、あなたの家への帰り道がわからなくなり、そのことを口実にしてあなたを引き留めることができるので、「もう少し今のまま雲の中に隠れていて欲しい」と私が願っている月なのに、その月をあなたは早く見たいと言うのでしょうか

このような解釈に対して、「恋ふ」は上二段活用で「乞ふ」は四段活用であること、「恋ふ」の「こ」は甲類で「乞ふ」の「こ」は乙類であること、この二点を理由にして異論を唱える人があるかも知れない。しかしここでは「恋ふ」と「乞ふ」の「語源」が同じであることを主張しているのではなく、「恋ふ」という語に対して類音の連想から「乞ふ」の意味が掛けられているのではないかと指摘しているにすぎない。

このような類音による掛詞の例としては、例えば「あられふり」という枕詞が「かしま」と「きしま(み)」に掛かる例があり([7]、p. 57)、いずれも霰に伴う「かしましい音」によるものだとされている。このように、掛詞や枕詞のかかり方には必ずしも「完全に同じ音」である必要はなく「類音」によってかかるものがある。したがって今の「恋ふ」と「乞ふ」も「類音」として掛けられていると考えればよい。

ちなみに「時代別国語大辞典 上代編」は「こふ(恋)」の項目の【考】の中で次のように記している([7]、p. 307)。

(前略) 乞フと恋フとは意味的に関係がありそうに見えるが、コに甲乙の違いがある。(以下略)

ここにも指摘されているように、「乞ふ」と「恋ふ」の用例を比較してみるとこの二つの語の間には単に音の近さだけでなく、意味的に深い関連もありそうに思われる。ただ先頭音の「こ」が仮名違いであるためにこの二つの語を語源的に同じ語だと断定することは必ずしもできない。しかし「恋ふ」と「乞ふ」が意味的にもきわめて「近い」言葉であることは疑いなく、「恋ふる月」に「乞ふ月」が掛けられていたとしても不思議はない。

ところで、それではなぜ、984番歌の作者は、もし本心で「月にもうしばらく隠れていて欲しい」と願っているのであれば、「吾恋月」ではなく本心どおり「吾乞月」と表記しなかったのであろうか。おそらく、もし「吾乞月」と本心をあからさまに表現したとすると、一つは第三句が「我が乞ふ」と四音の字足らずになることも考えられるが、もっとも大きな理由は相手の男が早く月を見たいと思いながら待っているのを目の前にして、面と向かって「月よ、もうしばらく雲隠れして欲しい」などと言えるはずもなく、「心の中で密かに」思っていることだからであろう。「月を見たい」と思う気持ちは作者の豊前国娘子とて同じはずで、しかし今は美しい月を観賞するよりも少しでも長く男といっしょにいるのが優先順位が高いので、男を引き留める口実ができるようにと月に雲隠れして欲しいと密かに願っているにすぎない。「恋ふる月」という表現の中に、「乞ふ月」という密かな本心を重ねて表現したのであろう。709番歌と984番歌を合わせて読むことにより初めてこのような解釈が可能となる。

以上のように解釈すると、第四句「月をや君が」の「をや」がこの歌で重要な働きをしていることがわかる。「をや」は「～なのに…か」という意味をもつ語である。このことは次の歌の例からも明らかである([1]、p. 448)。

10/1934 相思はぬ 妹をやもとな(妹哉本名) 菅の根の 長き春日を 思ひ暮らさむ

【大意】私を思ってくれない妹なのに、かいもなく、(菅の根の)長い春日を思い暮らすのだろうか。

この歌の「相思はぬ妹をや」は「思ってもくれない妹なのに…だろうか」の意味である。984番歌の第四句「月をや君が」の「をや」も同じ用法である。歌の作者である娘子は「月にしばらく雲に隠れていて欲しい」と思っているのに、男の方は逆に「その月を見たいので早く出てきて欲しい」と言う、この女と男の月に対する気持ちの「ずれ」を効果的に表現しているのが「をや」という語であろう。

3. おわりに

本論文では、これまで歌の意味があいまいで難解だとされてきた万葉集984番歌について再検討を行い、同じ作者による同じ月をテーマとした709番歌を手がかりに、984番歌の背景には「月が雲に隠れていることを理由に相手の男の帰りを少しでも長く引き留めようとする」女心があり、これがこの歌の解釈の重要

なポイントであることを指摘した。このように解釈することで、これまで歌の前半と後半の内容がうまくつながらず歌全体の意図がとらえにくいとされてきた問題がうまく解消される。

ところで、この歌にはひとつ不審な点がある。万葉集のほとんど歌は、単独の歌として理解可能であるか、あるいは前後の歌との関連から理解可能であるか、いずれかのパターンである。この984番歌は単独の歌として配置されているにもかかわらず、この歌だけではどうしても歌の内容が理解できない。これはきわめて異例なことである。もし異例でないとすれば、709番歌と984番歌は本来は隣どうしに配置されていたのかも知れない。両方とも同じ作者による同じ月をメインテーマとする歌だからである。もとは一体であった二つの歌が万葉集の編纂段階で巻四と巻六に分離された可能性がある。

最後に、709番歌に関して新日本古典文学大系の脚注に「この歌は平安時代に愛唱された歌らしい」とあるが（[6]、p. 406）、もしこの歌の作者が従来の解釈ような「焦点のぼけた意味のあいまいな」984番歌を作るような人であるならば、その人の歌が後世の人々に愛唱されるはずがない。本論文で指摘したように、常識的には誰でも「月は雲に隠れないで欲しい」と思うのであるが、あえてこれを否定して見せることにより、相手の男に少しでも長くそばに居て欲しいと思う女心をうまく表現したものであるからこそ、換言すれば、709番歌の背景には984番歌の気持ちが込められているからこそ、後世の人々に長く愛唱されてきたのではなかろうか。

参考文献

- [1] 「万葉集 二」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp. 56-57、2000年。
- [2] 「万葉集②」、新編日本古典文学全集、小学館、pp. 140-141、1995年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注（二）」、中西進、講談社文庫、p. 50、1980年。
- [4] 「万葉集注釋 卷第六」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 145-148、1960年。
- [5] 「万葉集 二」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 162-163、1959年。
- [6] 「万葉集 一」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 406、1999年。
- [7] 「時代別 国語大辞典 上代編」、三省堂、2005年。